コマンド・ガールズ　5

ケネス・ハートフォードの映画”HELL SQUAD”より

――冷戦時代から中東は当時から世界の火薬庫だった。
ソ連の後押しを受けたテロリストたちと、西側と同盟する勢力とが、
砂漠のあちこちで衝突していた。
テロリストの一味が、米国大使の子息を誘拐する事件は、そ
んな最中に起こった。
テロリストの要求に屈すれば、世界は破滅へと向かうことは明らかだった。
だが、悪が栄えた試しはない。
世界最強の美女たちが、
邪悪な企てを阻止すべく立ち上がるはずだった。

登場人物

ジャン　27歳。元ＣＩＡ。身長１７４センチ。鮮やかなストレートの金髪。プレイメイトを思わせるワイルドな美貌。

ティナ　25歳。いちばんの長身で１８０センチ。北欧系の端正な美女。ちょっと皮肉屋だが冷静なリーダー格。

モーリーン　25歳。ショートカット。ラテンの血が混じった情熱的な潤んだ眼。身長は１７８センチ

リサ　20歳。赤毛。十三歳で家出。パンク歌手のような鋭い顔つきに、油断のない向上心に溢れた眼。

ローレン　21歳。東部の出身。マサチューセッツ工科大学中退。典型的なワスプ顔で教養がある。

キャシー　18歳。カンザス出身。田舎くさく、白い肌にちょっとだけソバカスが残る。１メートルを越える、いちばんの巨乳。

5

不運というべきか、外は砂漠だった。

美女たちが連行されてきたのは、石作りの古いモスクで、一階は礼拝堂になっていた。その外に、ジープが三台ほど停まっている。

「キーはあるかしら」

「ご心配なく」

ローレンが小指に引っかけたカギ束をくるくる回した。

「シークの部下のポケットに入ってたの。たぶん、ジープの鍵もあるはずよ」
「気がきくわね」
調べてみると、そのうち一台だけ、合致した。美女たちは、シークの部下から奪ったナイフやライフルなどを荷台に積み込み、ジープに乗り込んだ。さいわい、地図も置いてあった。
「アマルって言ってたわね」
ジャンは、助手席のティナと一緒に地図を広げて見入った。
「これね」
ティナが地図の一点を指さす。
「もっとも、ここが何処だか分からないと、どっちに行けばいいのか分からないわ」
「大丈夫よ」
ジャンは微笑んで、砂漠を指さした。ジープの轍の跡が延々と続いていた。
「あれを追っていけば、どこかの街には出るわ。そこで訊ねればいいのよ。うまくいけば、ホテルに戻れるかも」
「そうね」
ティナは、Tシャツにくっきり浮かんだジャンの乳首を突っついて笑った。
「こんなかっこうで、大使の息子さんにお目にかかりたくはないわ」

だが、そううまくはゆかなかった。
五キロほど進んだとき、突然の砂嵐が美女たちを襲った。ジープは一メートルも砂にめりこみ、視界はゼロに近かった。
砂嵐はさいわい、数分でやんだが、エンジンに砂が詰まり、ジープは動かなくなってしまった。
「ライフルももう、使えないわ」
ジャンは銃を調べながら言った。
「砂だらけよ。手入れする道具もない。下手に使ったら、暴発しかねないわ」
「そんなものなの？」
キャシーが不安そうに訊ねた。ジャンが答えた。
「銃ってのはデリケートなのよ。私たちのお肌と一緒」
「そのたとえは適切とは言えないわね」
赤毛のリサが、髪の毛の砂を払いながら笑った。
「男のペニスのように……って言うべきじゃない？」
美女たちは笑った。

六人は、眩しい太陽が、照りつけるなか、ナイフと水筒だけを持って歩くしかなかった。
「サンオイル持ってくればよかったわね」

抜けるように白い北欧系のティナが、いまいましそうに剥き出しの腕をさすった。
「あんたが羨ましいわ」
ティナはラテン系のモーリーンの、浅黒い肌を撫でた。
「でも、あんまり日焼けして、皮が剥けちゃったらまずいわ。ステージに立てなくなっちゃう」
「大使の息子さえ救出したら」
ジャンは言った。
「合衆国政府にボーナスを弾ませるわ。半年くらい休養できるくらいのね」
美女たちは歓声をあげたが、キャシーの言葉にすぐにシュンとなった。
「その前に、私たち、帰れるの？」

二時間ほど歩くと、地平線に小さな林が見えた。
オアシスだった。小さな湖があった。
美女たちはTシャツを脱ぎ捨て、次々と湖に飛び込んだ。
「助かったわね！」
「神のお恵みよ」
「アラーの？」
「まさか」

はしゃぎながら水しぶきをあげる美女たちは、湖畔に三人の男たちが忍び寄ったのに気づかなかった。
「動クナ！」
一人の男の片言の英語にビクッとした美女たちが振り向くと、ターバンを巻き付けた男たちがライフルを構えていた。
美女たちは両手をあげ、乳房を隠すように腰を屈めて首から下を水に潜らせた。
「要求はなに？」
ジャンが叫んだ。男たちは顔を合わせてアラビア語で何か囁きあっていたが、やがて英語を話せる男が怒鳴った。
「両手ヲアゲテ、出テコイ！」
両脇の男たちが卑猥に笑った。美女たちがナイフ以外の所持品を持っていないのを確かめ、目的を、彼女らの肉体だけに絞ったようだった。
「キャシーとリサは、左の男。モーリーンとローレンは右の男。私たちは、真ん中の男をやるわ……」
ジャンが美女たちに囁いた。
「ティナ。真ん中の男は殺してはだめよ。英語が喋れるから」
六人は両手をあげたまま次々と水からあがった。アラブ人たちは、パンティ一枚の美女たちの

見事な裸体に、目を見張り、興奮したように口々に呻いたり、わめいたりした。
美女たちは、三組に別れ、それぞれの標的に近寄った。
男たちは、美女たちが丸腰なのを確かめると、ニタニタした顔で、ライフルを足元に置いた。
その瞬間だった。
「アタック！」
ジャンの号令を合図に、美女たちは男たちに飛び掛かった。
キャシーが、男の股間を蹴りあげた。男はうめき、両手で脚のつけ根を押さえて、体を折り曲げた。リサは男の首に腕を回してしめあげた。男はのけぞった。キャシーは、男の睾丸をつかみ、ひねりあげた。男は絶叫した。リサは男の首をきつくしめあげた。やがて男は窒息し、絶命した。
モーリーンは、右側にいた男に懐に飛び込み、股間に膝蹴りを浴びせた。男はうめき、膝をついた。ローレンは男の鼻っ柱を蹴って仰向けに倒し、首を両脚ではさみつけ、しめあげた。男はローレンの脚をつかんで必死にひきはがそうとした。だが、モーリーンは男の腹部に馬乗りになり、拳を固めて睾丸を殴りつけた。やがて、男は睾丸と喉笛を潰され、昇天した。
彼女ら男たちの死体を見下ろしながら立ち上がったとき、すでにジャンとティナはライフルを構え、股間を両手で押さえて苦しそうに座りこんだ男の脳天に銃口をつきつけていた。
「言いつけに従わないと、あんたも仲間と同じ目にあうわよ！」
ジャンが脅した。男は怯えたようにジャンを見つめた。

「正直に言いなさい。アマルはどの方向？」
男は、ゆっくりと腕をあげ、西を指さした。
「ここからどのくらいの距離？」
「三マイル……クライ」
「三マイルなら、なんとか歩いていけるわね。一時間で着くわ」
ティナが、男たちが乗っていた三頭のラクダを見やりながら言った。
「あれで移動するわけにはいかないしね」
「そうね」
ジャンは頷いた。
「アマルには、ホテルとか店はある？」
「アル……」
「オッケー」
ジャンは引き金をひいた。男は脳天から血を吹いて倒れた。
「かわいそうに」
モーリーンが三つの死体を眺め回しながら言った。
「変な気起こさずに、案内してくれれば、死なずにすんだのにね」
「私たち相手にそれは」

キャシーは自分の乳房をつかみ、腰をくねらせた。
「無理というものじゃない？」

一時間後。
地平線にアマルの街が見えてきた。
「ここの郊外だって言ってたわね」
ティナが言った。
「まず、街で一休みする？」
「そのつもりだったけど」
ジャンは目を細めて、街を見つめた。
「シークの部下が、街に潜んでいる可能性は否定できないわ。この格好じゃ目立つし」
「じゃ、どうするの？」
「警護の兵は五人。こちらは六人にライフルが三つ」
ジャンは五人を見回した。
「すぐに襲撃するわよ」

街を迂回してさらに北に一キロ。

別荘は白い煉瓦塀に囲まれた、小さな目立たない造りだった。門のところに二名、警護の兵士が所在なげに煙草をふかしながらお喋りしている。
門から百メートルほど離れた茂みに、六人の美女は身を潜めた。
「リサ、出番ね」
ジャンが微笑んだ。
「ここから、届く？」
「任せておいて」
「ナイフは二つしかないわ。失敗は許されないわよ」
「うるさいな。黙って、みててよ。ボス」
リサはナイフを右手に構え、狙いをつけた。

門を守っていた警護兵は、同僚がいきなり呻き、耳の下あたりを押さえて倒れるのを目にした。
頸動脈から血が噴出し、男は静かに倒れた。その部分にナイフが突き立っていた。
敵襲……？
警護兵は慌ててライフルを構え、腰を低くして周囲を見回した。
次の瞬間、ぶんと唸りをたてて、光るものが飛んできた。警護兵は右目に焼かれるような痛みを感じ、つづいて視界が血の色に覆われた。

警護兵は、右の眼球を突き破ったナイフを両手で持ち、呻き声をあげて膝をついた。

「やべ！」

真先に駆けだしたのはリサだった。男の悲鳴を別荘内の仲間に聞きつけられてはまずい。

だが、全速力で走るリサを追い抜いて言ったのは、キャシーだった。一メートルを越す巨乳を揺らしながら、キャシーはいち早く悶絶する警護兵に駆け寄り、その喉笛を踵で思い切り踏みつぶした。警護兵は絶命した。

「脚、速いじゃん」

リサは息を切らしながら言った。

「見かけによらないわね」

「こう見えても……」

キャシーは胸を大きく上下させながら答えた。

「ハイスクール時代は、カンザス州選手権の１００メートル走チャンピオンだもん」

門をくぐり、そっと内部をうかがった。窓はすべてカーテンで仕切られている。扉にはすべて鍵がかかっていた。

「強行突入する？」

ティナが訊ねた。

「人質がいるのよ。無茶はできないわ」

ジャンは首を振った。

「残るは三人。なんとか外におびき出す方法はないかしら」

「あの扉が開けば、いいのよね」

ティナがつぶやき、ローレンを見た。

「あんたのハイテク機器、部屋に置いてきたのよね」

ローレンはしばらく何かを探すように地面を見ていたが、やがて微笑み、頷いた。

「やってみるわ」

「機械なしで開けられる？」

リサが訊ねた。ローレンはウィンクしてみせ、足元に落ちていた針金を拾い上げると、扉に近づいた。鍵穴に針金を差し込み、しばらく動かしていたが、やがて針金を抜くと、扉の把手をつかんで引いた。

扉が開いた。

「やれやれ」

リサが肩を竦めた。

「あんた、ハイテクに強いだけじゃないんだね」

キャシーが笑った。
「マサチューセッツ工科大学じゃ、ピッキングも教わるの？」

美女たちは、二手に分かれた。ローレンは、裏口の扉を開けるべく、リサとキャシーを連れて裏庭に回った。ジャンとティナ、モーリーンは、ローレンが開けたばかりの表玄関からそっと内部に入った。

玄関を抜け、扉をそっと開けて覗くと、広間だった。厚いカーペットが敷かれ、壁に大画面のテレビが設えられていた。二人のアラブ兵が、テレビ画面に見入っていた。画面には、アメリカ製らしい、ハードコアなポルノビデオが再生されていた。アラブ兵たちは、白人女性のレズシーンを、食い入るように見つめながら、生殖器を剥き出しにして、右手で握りしめ、上下させていた。

モーリーンが微笑んだ。
「生身のアメリカ女を見せてあげましょうか」

言うなり、彼女はTシャツを脱ぎ捨てた。盛り上がった張りのある乳房、引き締まったウェスト、たっぷりと張った腰、女らしい曲線に溢れたボディをくねらせ、長く美しい脚を交差させながら、そっと広間を横切り、自慰に耽っているアラブ兵たちの前にいきなり姿を見せたのだ。

アラブ兵たちは、画面から抜け出てきたようなグラマラスな美女の出現に、口を大きく開けて

硬直し、ペニスを握ったまま、ゆっくりと腰をあげた。

モーリーンは官能的な厚い唇を舌で嘗めながら微笑みをつくり、それから右足を撥ね上げた。

二人のアラブ兵は続け様に股間を蹴りあげられ、両手で股間を押さえて倒れた。ジャンとティナがダッシュし、二人に飛び掛かり、息の根を止めた。

「ジャン！」

ローレンが広間に入ってきて、壁のテレビ画面に展開されているレズシーンに息を呑み、それからペニスを剥き出しにしたまま床に転がった二人のアラブ兵の死骸を見て、肩を竦めた。

「アラーの神もさぞお怒りでしょうね」
「どうだった？」
ジャンが訊ねた。
「地下牢が見つかったわ。警護は一人よ。キャシーとリサが見張ってる」
「オッケー、いよいよ大詰めね」

階段を下りると地下室になっていて、奥の鉄格子の前に、一人のアラブ兵が銃を構えて立っていた。鉄格子の向こうは薄暗くかったが、床に横たわった人間の後ろ姿が見えた。チェックのシャツにジーンズ。明らかに大使の息子だった。
「誰がやる？」

ジャンは美女たちを眺め回した。
「残る敵はあいつ一人よ。思う存分、仕上げを楽しめるわ」
「銃さえなければ……」
最年少のキャシーが言った。
「私がやるわ」
「銃なら、任せとき」
リサがナイフを取り出した。
「今度は外さないわ」
「オッケー。じゃ二人に任せるわね」
ジャンは頷いた。
リサはナイフをかざし、狙いを定めてアラブ兵の右腕を狙って投げた。
銃は見事に、アラブ兵の手の甲に突き立った。アラブ兵は悲鳴をあげ、銃を取り落とした。キャシーが猛然とダッシュし、兵士の股間を蹴り上げた。兵士は血まみれの手で、股間を押さえた。さらにキャシーは男の喉笛をつかんで背中を鉄格子に押し当て、二度、三度、膝を突き上げた。睾丸を続け様に蹴り上げられた兵士は苦しげに顔を歪めた。
鉄格子の向こうの少年が立ち上がった。白い顔にかすかにあばたの残る童顔だった。キャシーは、兵士の喉笛をつかんだまま、少年に向かってウィンクした。

「助けに来たわよ」